The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『フィヒテ論攷』成立の頃とそれから
Author(s)	本田, 敏雄
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 49-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6272
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『フィヒテ論攷』成立の頃とそれから

本田　敏雄

２００４年７月中旬、神戸高専Ｈ氏研究室にて

今日も朝から暑い一日、忙しい授業の合間やっととれた昼下がり静かな時間に、H が一人クーラーを効かせ、散らかった机上の隙間に本を開いている。コーヒーの匂いが部屋に満ちている。彼が居るのは 6F 建ての建物で、低学年１～３年生までの HR 教室が４F まで入っているが､解放廊下でありそれに H の部屋が６F 山側の一番奥突き当たりにあるので、いつもそれなりに静かである。そこへ、非常勤に来ている後輩 I 氏が講義を終え、足取りも軽やかに部屋に近づいてくる。今日で夏休み前授業の全日程が終わるので、I 氏はかなりリラックスして楽しそうに見える。しかし学校側の一方的な都合で、６年続いた非常勤が今年前期で終了することになっている。

軽くノックの音。H が顔を上げると、ドアを開けて I が入ってくるのが見える。外は暑いのにどこかさっぱりした顔をしている。

I　ああ、涼しい～、生き返りますよ。

H　やあ、お疲れ様、コーヒーを入れといたよ。

I　はい、いつもありがとうございます。

I は、いつものソファに座るために部屋の奥に進みながら、H の机上の本にちらっと眼をやる。H が席を立ち、入り口横の流し台に置いてあるコーヒーを I に入れてあげるついでに、自分のカップにも注ぎ足して入れている。H は一日に 4,5 杯は飲むだろう。

H　今年も、ご苦労様でした。きみは明日から夏休みかい。それとも他の非常勤先はまだあるのかい。

I　いえ、よそは、もう先週で終わりました。

H　それは、いいね。ぼくも今日水曜午前までで授業がすんだし、明日からは二日間木金とスポーツ大会だから、実質今朝で仕事から解放されたから、今からもう夏休み気分なんだ。

Hからカップを受け取り、一口すすってから、

I　今年の夏、何か書かれる予定があるのですか？

Hは、部屋の真ん中に位置する机に戻り座るところだったが、首だけそちらへ向けて

H　うん、今春、阪大の里見、浅野両先生が退官されただろ。その記念号を出すのに原稿を出して欲しいと言われたのでね、それの準備をするつもりなんだ。

I　ああ、そうですか。

H　僕なんかが書いていいのかどうか、ちょっと迷ったんだけど、フィヒテについて書いてもかまわないというので、お受けすることにしたんだ。里見先生に僕のD論の副査をして頂いてるから、できれば何か書きたいと思ったんだよ。里見先生はぼくが２回目の４年生をやってる時に来られたのだったかな。いろいろとあって、お二方に学生時分は縁がなかったし、神戸高専に勤務するようになり阪大へ週に一回通うようになっても、フィヒテの勉強に大峯先生の処へ行くばかりだったからねえ。浅野先生は、僕が学生の時分、医療短大に勤務されていて、高橋先生のカントやヘーゲルの演習には一緒に参加されていた。でも高橋先生に、「この子もキルケゴールをやりたいと言っている」と紹介されたとき、「足手まといになるだけです」と一蹴されたのを覚えているよ。どんな人だと思ってしまったが、でもその日の演習の後スイカを皆で食べてる時、人の良さそうな顔で、「これを今食べると夜のビールが美味しくないんだよな」なんて言ってみんなの笑いを誘いつつ、言葉と裏腹にぱくぱく食べていたっけ。今思えば優しい人だったな。もっと話しとけばよかった。両先生の思い出はそれぐらいなので、30 枚なんてとても書けたもんじゃないんだけどね。里見先生には、文学研究科が社会人枠を作るとき、要項の文言も同時に作る時だったので、溝口先生からの働きかけが大きかったのだろうけれど、僕は修士中退なのに、既発表論文等の書類審査の末、結局修士修了相当ということで、社会人枠入学一期生として後期課程に入学させて頂いたのだしね。その後も、公平なご配慮を頂いたと感謝しているんだ。端から見ていて、そう感じていたんだけど、先生は好悪を優先せず、するべきことを粛々となさる方だからね。

I　そうでしたね、その話は以前にもお聞きしていましたね。で、（と言い、両手をソファの肘掛けについて身を前にのめり出すようにしながら）今回の論文ではどういう当たりを書こうとされているのですか、よければ教えてくださいよ。

H　うん、構想がまとまってきてたらそうさせてもらうんだけどね、最近依頼を受けたばかりだから、まったくこれからなんだよ。

I　そうですか・・・　うん、D論で思い出したのですが、公開審査の時、K君が「知的直観を持ち出されても、なんだか誤魔化されているようだ」って言ってましたよね。

H　そうだったね。知的直観をとっつきにくいと思っている人には、どうしようもないの

だろうね。名前で拒否反応起こしてるんじゃないかな。実際はフィヒテが言ってるように、決して特殊な人にしか備わっていないものじゃなくて、我々のどの一人だって、それがなけりゃ手も足も動かすことのできないというごく当たり前の能力のことを言っているのだけどね。知的直観は、我々の行うあらゆる働きに随伴し、それらの働きが直ちに自分の働きだと知らしめる働きであって、その役割をそう名づけているだけだ。K 君だって生きていて生きていることを直に知っているというだけで、もう知的直観を生きているのにね。

I　うーん、でもそこを説明しようとして反省の俎上に載せると、途端に、「生の直接性に密着した直知」なんて表現になるから、胡散臭いって思うんでしょうね。

H　そう、でもそんな言葉がどうして出てくるかを理解するには、言葉尻を反省でこねくり回すのではなく、自分の身を振り返って自身に沈潜してみたら、すぐに了解できることなのにね。その生の事実を、反省により直接意識から翻って、反省の言葉（命題）で捉え直そうとするから、そして、反省の言葉で表現されたものだけに真という価値を与えようとするから混乱するだけなんだよね。あの時、それを十分に説明できたとは思ってはいないんだけど、でも、あそこを突破しないとフィヒテは解らないし、さっぱり理解できないんだよな。でも、それはフィヒテの責任ばかりじゃなくて、そもそも反省に長けた哲学徒の誰もがかかる罠に落ち込んでしまうからなんで、それを理解できない我々の方の責任でもあるんだよね。

それに実のところ、デカルトの cogito ergo sum だって、知的直観が解らなきゃ、解らないと思うんだけどね。何故なら、思惟の働きが媒介を入れずに直ちに現存在ないし存在であるという事実を、我々一人一人が直接に確信することができるのは、そもそも何であれ知るという働きを働くことが直ちに知が知で在ることに他ならず、さらに知のこの原事実こそが現に我々一人一人の在り方であり、その無媒介性を支えているのが知的直観に他ならないからだよね。このあたりに関して、大峯先生がフィヒテ演習中、デカルトは、cogito ergo sum で正しいところに出たけれでも、でもそこを res cogitans とし、思考実体と捉え直したところで、また通常の伝統的な実体概念の枠組みの中へ落ちてしまったというようなことを何度か口にされていたことを思い出すよ。僕もその通りだと思っている。デカルトは、従来のアリストテレス以来の概念装置（実体－属性関係で命題構造を捉え、これに基づく論理構成で世界を記述できるし、又それが直ちに世界(Sache)の構造でもあるとする）を用いた段階で早くも、せっかく到達した cogito の本質を掴むのに失敗してるけど、フィヒテはそこを乗り越えようとして、独特の記述方法論、プラトンのでもなく又ヘーゲルのとも違う彼独自の弁証法を案出してくるんだよね。

I　では、そのあたりがまだ十分に皆さんに伝わっていない、理解されていないというのであれば、今回の論文では、そこのところを詳しく書かれたらいいんじゃないですか。

H　うーん、でもねその辺は、デカルトと切り離してだけど、D論で真っ正面から十分論じ尽くしたはずなんだよね。フィヒテの方法（生成的方法、一切を Genesis に翻す、一切の生成の現場に入り目撃する）に即して十分書いたはずなんだ。まだやるとすれば、別の

アプローチから迫るのがいいかもしれないね。溝口先生にも、フィヒテに即してばっかりじゃなく、文献をたくさん読んで、比較から入ることを言われたからね。

I　でも H さんの考えでは、それだと、知識学の展開というか、知識学の伝達には、不十分にしかならないんでしょう。フィヒテもそれを知っていたから、講演で直に相手に伝えるということをしようとしたと言うんでしょう。つまり作品（書かれたもの、gesetzt）とそれを setzen しているものたる energisches Denken とを同時に提示してその生成の現場での聴講者ないし読者の体得(Realisieren)を求めるという方法をとったということでしたよね。

H　そう、その通りなんだよね。でも、今回は別の視点から、比較から入ることにしようと思っているんだ。

と、言いながら、H は、机上に開いていた本を手に取り、I に示して

H　実はいまデデキントの『数について』なんか読んでいるんだけどね。その理由は、論理学者や無限を扱う数学者達の方法との対比を通して、フィヒテの超越論的哲学の方法(Methode)を浮かび上がらようと思っているからなんだ。ま、それでなくてもこれはこれで、無限集合を扱っていてとても面白い本だけどね。

H は、本を机上に戻しながら、「うん決めた」という顔で

H　そうだねえ、やはり、聞いてくれるかい。ここ数年は、いつもこんな風にして聞いてもらい、君からの質問を斟酌しつつ対話の中でじっくりと自分の考えをまとめてきたんだものねえ。

I は満足そうに

I　ええ、いいですよ。授業は終わったし、時間はたっぷりありますから。

そう言って、I は、コーヒーカップをゆったりと口へ持っていった。H は、椅子の背に深くもたれ掛かると、両手を頭の後ろに当て、部屋の中空を見据えるようにしながら語り出した。

H　そもそも論理学者たちの立ててくる同一律、矛盾律からしてフィヒテのそれとは同列に扱うことはできないと思うんだ。フィヒテは同一律から矛盾律を出すのだが、彼らは、自己と他者との区別を先行させ、両者の区別を介して、同一性へと進んでいるのだから。しかもフィヒテの言う同一律 Ich=Ich は、A=A というような対象認識に際して使用される同一律ではなく、唯一自己言及する無限の運動体たる知の全構造の根底をなす同一律であって、そこから対象認識上の同一律 A=A、矛盾律 A・A=0 も導出される同一律だからね。

I　ちょっと、そこのところを詳しく説明してください。

その声に H は座り直し、今度は I の方に顔を向き変えて

H　うん、僕が思うには、デカルトやフィヒテと論理学者達また常識に立つ人たちとの大きな相違は、前者は同一律 Ich=Ich が対象認識の同一律や矛盾律の根底にあることを要求するが、後者は矛盾律から同一律を導出するという根本的なものなんだ。

後者の命題論理における教科書的な定義を見ても解ることだが、同一律は A≡A よりは、A⊃A と記されている。こう表記することが何故可能かというと A⊃B かつ B⊃A であるこ

とを A≡B と同値とし、この B に A を代入することで、(A⊃A)・(A⊃A) ≡ (A≡A) となり、A⊃A かつ A⊃A は、A⊃A の繰り返しであって、ブール代数において又集合論において、A・A＝A[1]なのだから、A⊃A 一つで十分だからなんだよ。含意関係にある前件と後件とが同一であって、逆も又成立するという特殊な場合というわけだよね。つまり、彼らの世界観においては、対象存在たる A, B 等の区別がすでに存在している世界から出発しているのだ。そして原理的にそれ以前に立ち戻ることはないということだ。ここだけから見ても、彼らの論理は対象認識の世界しか相手にしていないし、またしえないということが見えるよね。

I　いや、ちょっとまってくださいよ。対象認識の世界しか相手にしていないということは、事実そう言えるとしても、その論理は対象世界しか相手にしえないとまで言えるでしょうか。彼らは、対象認識の世界を構成する論理を扱う論理としてメタ論理ということも言ってくるでしょう。

H　確かにね。でもね、論理の構造を記述するメタ論理と世界を対象としそれを記述する論理との区別は、論理の整合性を救うためにのみ、しかも論理学者の中でだけ行われている区別なんじゃないかな。両者に適用される論理法則が変わるわけではないんだろう。

僕が言いたいのは、彼らの基本に使っている論理法則の体系を一つの反省理論の体系と呼んで良いと思うんだが、それによっては、世界構造の記述は可能だが、そもそも反省理論が抱えている矛盾は引きずったままであって、それは後期に入ってフィヒテが開始した超越論的方法でないと克服できないということなんだ[2]。ここを、論じてみると、

と言い、H は今度は俯いて机上のペンを手に取りそれを弄びつつ、また顔を上げて

H　先の同一律の考え方において、A≡A の左辺の A と右辺の A とは同一とされてはいるが、それに先だって左辺と右辺とに置かれているのであるから当然区別されても居るはずだよね。A は A だと言うときに主語の A を反省して述語の A が得られ、それとの同一性を≡が立てているよね。

I　はい、認めます。

H　そこのところをデデキントのこの本『数について』の「§有限と無限」に即して立論してみようか。今、φを任意の集合 A が自己を自己自身に映す合同写像であるとすると、φ（A）＝A となる。自己自身を写像するという限りφ（A）＝A であり、A にφ（A）を代入すると、φ（φ（A））＝φ（A）＝A となる。そしてこれは、A が写像つまり自己内反省を繰り返す限り、無限に進行するべきものであるが、この A を数字の 1 とすると、我々は限りなく数を増大させることができる。このようにして我々は量の概念を確保できる。ところで、その無限進行を支えているものは、いったいなんだろう。デデキントは、ここ

---

[1] 文中、≡と＝とが混在するが、命題の同値関係は≡で示され、クラスや概念の等しさは＝で示される。対象のレベルの相違によって使い分けられるということで、等号としての機能は同じ。

[2] フィヒテによる反省理論の矛盾の指摘と、それを克服するための哲学史上例のない深い洞察、それに基づく知識学の展開という立論は、D.ヘンリッヒ『フィヒテの根源的洞察』（座小田豊、他訳、法政大学出版、1986 年）を嚆矢とする。

でこのような無限集合として自我を例示するだけですませており、そんな問いを立ててはいないしまた答えてもいないが、代わりに答えるとすれば、それは、観察者（数学者、哲学者）による写像の無限遂行可能性とその遂行に他ならないだろう。そしてその無限遂行可能性が人間理性にとって普遍的に妥当するということを受け入れるものは、観察者（数学者、哲学者）本人の自己反省遂行能力への確信(Gewissheit)に他ならないでしょう。これらのことは、既に『全知識学の基礎』その他で、フィヒテが自己意識の反省ないし定立の限りない反復可能性(Wiederholung des Setzens)として取り上げていることでもある。

今、私が言っていることは、A を Ich と考えると、A＝A は、A の自己内写像、そして自我の自己内反省を意味すると考えることができるということだ。そして、デデキントは Ich のこのような思考の世界は、無限集合となるというのだ。そりゃそうだ、反省は無限に反復可能だし、理性はそれを見通すことができるからね、この点に文句はない。デデキントではここまでだけど、しかし、このような自己自身をも含む集合の集合としての A、又自己言及する Ich の自己自身についての体系（これも一つの集合）は、ラッセルが指摘する周知のパラドックス[3]に陥ることになる。この点から生じる自己矛盾に関して、別の切り口からだけど、フィヒテも『知識学の新叙述の試み』の中で指摘している。反省作用によって、自我が自我を捉えようとすると、現に反省を遂行している主観としての自我を捉えるために無限遡及に陥って、けっして現に反省をする主観たる自我に届かないと。ならば自我は自分が自我であることの認識に決して達し得ないのだろうか。いやそうではない、自我は自己内反省を遂行し、自分が自分であることをちゃんと了解できている。自我は自分を自我であると知るために自己内反省を遂行したのだから。しかし、その反省ではその反省を遂行した自我が残される、そうすると再度・・・という風に無限遡及に陥ってしまう。だからといって、Ich の思考世界は、成立し得ないのだろうか。この矛盾によってその成立の可能性が奪われてしまうのだろうか、否である。この循環を発見して慌てるのは、反省であり、その解決を目指して働くのも反省だろう。しかし反省はこの矛盾を克服できない。何故なら、反省が即、知全体であるのではないからだ。この事実から明らかになるのは、反省を根底で支えているものは、実に反省作用ではなかったということだ。自我は、この反省構造も含めて自身（知）の全貌を明らかにするためには、反省を遂行するしかないのであるが、反省が反省であることを支えているのは、実は反省作用では有り得ないということだ。普段は決して意識に上ることなく反省を支えているもの、それをこそフィヒテは知的直観と言ったのだ。自我は反省によって、自己を自我として(Ich als gesetzt)知るのであるが、自我の直接意識(Ich als setzend)は常に反省に随伴し、働き持続しているのだ。

---

[3] 「今それ自身を要素として含まない集合のすべてを考えよう。明らかにこれは一つの集合であるが、この集合はそれ自身を要素として含むであろうか。その集合がそれ自身を要素の中に含むとすれば、それは自分自身を含まない集合の一つとなり、従って自分自身の要素でなくなる。またもしその集合がそれ自身の要素でないとすれば、自分自身を要素として含まない集合の一つとしてそれ自身の要素になる」Bertrand Russell, *Introduction to Mathematical Philosopy*, Routledge, London and New York, 1995, p.136. 訳は、『数理哲学序説』（平野智治訳、岩波文庫、1974 年）、179 頁を利用させて頂いた。

現に我々は日々眠り起床し、毎日同じ自我を生きることができる。それが可能なのは、自我が、眠る都度、生まれたり消えたりするのではなく、自己反省を働かなくとも、直接意識として持続しているからだろ。自己反省もせず眠っていても、目が覚めて、「あ、眠ってたんだ」なんて思えるのも直接意識が働き持続していたからだよね。誰かある人に知的直観の存在を認めさせるには、反省だけでは自己意識の成立を説明し得ないことを無限遡及という問題で気づかせ、次いでそれでも自己意識が成立しているという事実を本人の身に照らして納得させ、そして今の眠りからの覚醒のような何らかの例示によって、わが身に振り返らせて、納得させるという方法をとるしかないと僕には思える[4]。

反省とこの直接意識たる知的直観とは、点と線（延長）のような関係にあると僕には思える。点は点であり線ではない、線も又そう。だけどこの線上に、点は連続に並ぶということかなあ。この点ということで僕は一瞬一瞬を切り取ってきて静止した認識をもたらす反省を想定しているのだが、その反省が働いているときに、それが連続であること、一定の法則の下に隣接点を持つ形で並んでいること、つまりそれらすべてが自分の反省であると知り、それらを統一的に把握できるのも、あらゆる知の働きに随伴している知的直観がその連続性を保証するからだよね。そしてそれは、現に働く反省を支えるのに統一するのに働いているのであって、反省の成果である命題のように、反省の中に現れてくれない。それで知的直観と反省との総合としての知の全体は、反省の働きを通しては、矛盾する命題によって指し示されることとなるしかない。例えばボルツァーノが『無限の逆説』[5]で、点と直線とに関して、「与えられた延長体をどんなに分割しても、特に分割の結果生じる部分の数が有限な場合には無論のこと、先に見たように無限に分割を続ける（たとえば連続的に二分する）場合ですら、必ずしも単純な部分に至るものではないということが認められなければならないであろう。にもかかわらず、ひとは、あらゆる連続体は、結局は点から、しかもただ点だけから構成されうるということをあくまでも主張せざるをえない。そして、この二つの考えは、正しく理解された場合にのみ十分によく調和するのである」と言う。この言い分から、点と延長の両者の存在を理性は認めざるをえない（正しい認識）が、しかし、延長の分割という操作では、点に至ることはできないという指摘からは、分割という操作（分析、反省の繰り返しの遂行）による点と延長との一元性を説明できないという不十分さの表明が見て取れるよね。

僕はしかし、ボルツァーノと異なりカントに倣って、その構成要素は点（単一な部分）としか考えられず、しかもその延長も実在と考えざるをえないものは、時間と空間という我々の認識の形式すら産出する我々の知であると思う。点と延長（延長的連続）とにまつわる不可解さは、直観と反省（概念的把握）をそのどちらか一方に還元したり、導来しよ

---

4 知的直観を掴まえさせる時だけではなく、一つの知の十全なる姿を掴まえさせるのにもフィヒテが取ったのはこの方法であると、私は思うし、反省の対象からするりするりと常にその背面に逃げていくものを知らしめるには、そうするしかないと思う。

5 ボルツァーノ著『無限の逆説』（藤田伊吉訳、みすず書房、1978 年）、81、82 頁。

うとしても我々の反省作用ではできないことの写しであると思えるのだ。デデキントやその他、集合論によって数論的に連続を論じる論者達は、ひたすら直観と切り離して反省のみによって、論じ尽くそうとしているようだ[6]。しかし、それは先に言ったような逆説に陥ったり、相矛盾する命題をどちらも認めざるを得ないという結果になるしかない。

これに対してフィヒテは、知という生ける働きの両側面として反省と直観とを捉えることにより、生ける働きの生成現場においてそれを一元化させようとした、そして特に後期知識学の叙述には、その現場を如何に読者や聴講者である我々の内に現出させるかということに腐心しているのが見て取れる。こういう生なものを捉えまた伝えるには、そうするしかないだろうと思えるよな。

ボルツァーノや論理学者達が忘れているのは、このようなフィヒテの超越論的視点だ。それを欠いているから、対象として客観的に提示できる点と延長（連続）という二つだけに注目しているのだけど、実際にはこの現場には、それら二点に注目する我々の理性作用も存在しているのであって、じつは三者が存在しているのであるから、それら三者の関係を解明しない限り、上記二点についての正しい把握は決してできないのだと言いたい。超越論的な眼の中ですべてが生起しているということだ。先のパラドックスを避けるために、論理型(Type)を区別するだけですますのは、恣意性の誹りを免れえず、単なる不徹底だ。

相反する二つの断片としての考えをボルツァーノの要求するように正しく理解することは、それら両方とも成立するとして受け入れることができ、点も線も自らの思考空間の内に自由に引くことのできる現に生きている理性としての数学者自身しかいないだろ。同じように自己言及する自我の自己の全貌についての発言内容は、命題として切り取ると、二つの矛盾する命題として並べられるしかないが、それらを受容し受け入れることができるのは、現に生きた哲学者の確信の内でしか可能ではないんだよね。そこを記述できるのはフィヒテの弁証法しかないと、僕は確信している。ラッセルは、彼の西洋哲学史の中で、デカルトの cogito について、「私は考える(I think)ということが彼の究極的な前提であった。しかしここで私(I)という語はまさに不当である」[7]と言っているが、それこそ、不当な発言だ。超越論的自我は、知の一切の出来事を成立させる場であり且つその一切を目撃するという働きでもあって、世界の内に入っていると同時に出てもいるという世界の限界たる眼として存在しているのだからね。これを捨象しては、世界の記述が完成するどころか、そもそも始まるはずもないのだから。

I　うーん、面白いですね、こういう解釈は初めて聞きました。点と線、それに反省と直観

6　「…私は、幾何学的な明証に逃げ道を求めていた。いまでも私はこのように幾何学的直観に助けを借りることは、…。しかしこのような微分学への導入が科学性を有すると主張できないことは、誰も否定できないだろう。… 私は、無限小解析の原理の純粋に数論的な全く厳密な基礎を見いだすまではいくらでも永く熟考しようと固く決心した。」デデキント、『数について』（河野伊三郎訳、岩波文庫、1984年）、9 頁。但し文中「…」は、論者による省略部を意味する。

7　Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Routledge, London and New York, 1946, p.519.

を対応させるところは、ちょっと議論が荒い気がしますが。

H　うん、認める。僕も口にするのは初めてだからね、こういう分野にまで言及するのは。議論が多少乱暴な点は勘弁してください。ちゃんとした論文にするにはもう一息というところだと自分でも思っているよ。

I　でも、おかげで H さんの最近の関心の在り所が解りましたよ、そして今後のお仕事の方向も、だいたい。

H　そうだね、あと超越論的視点といってもヘーゲルのそれだと何にもならない[8]ので、ヘーゲルの方法論との比較も僕の『フィヒテ論攷』の中でやったのより、もう少し徹底的にやりたいと思っている。それになんと言ってもフィヒテの宗教論を論じておきたいんだ。今日の話で取り上げたのは、絶対知の成立あたりまでで済んでしまう問題ばかりで、これらは、フィヒテの 1801 年までの考えで処理できる範囲のことだ。しかし、フィヒテの真骨頂はその先にあって、絶対知の自己滅却と表裏しての絶対者の登場にある。ここで哲学上のあらゆる問題が論じられる場が開かれると思っている。神秘主義者達との接点もでてくる。フィヒテの Denken の凄さは、そこまで行かないと分からないからね。

I　そこからの話は、この部屋で何度も議論させてもらいましたね。ああ、もう日も大分傾いて外も涼しくなってくる頃です。コーヒーどうもごちそうさまでした。

H　いやあ、これから寂しくなるけど、またいつでも遊びに来てくださいね。

I の帰り支度をする姿を、H は立ち上がって、眼を細めじっと見つめていた。

（ほんだとしお　神戸市立工業高等専門学校教授）

［キーワード］
超越論的視点　　絶対知　　論理学　　パラドクス

[8] 両者とも同じく超越論的哲学と言えるが、ヘーゲルの立場と後期フィヒテの立場の違い、両者の弁証法の展開の仕方に関して、拙著『フィヒテ論攷』第五章で、総合における媒介という側面から基本的なところは明らかにした。しかし、後期知識学とヘーゲルのエンチクロペディとを題材に取り、絶対知と絶対者の関係を中心に据え、学の展開の実際に即し、両者の学の体系の全貌を詳しく比較検討したいが、それは今後の課題である。